名古屋女子大学　紀要　**39**（人・社）　291～295　1993

『フランケンシュタイン』における疎外観

堀出　稔

A Sense of Alienation in *Frankenstein*

Minoru HORIDE

現代科学・技術の進歩は，人間の可能性を飛躍的に実現させ，未来を切り開く大きな原動力となっている．一方その幣害は，生きとし生ける者を危機的状況に追い込む場合もある．この人間存在の矛盾は，遠く19世紀初頭にメアリー・シェリーによって書かれた『フランケンシュタイン』に登場する科学者ヴィクター・フランケンシュタインと彼の創造した怪物との関りの中にも見い出すことができる．その共通性は，人間が存在の本質を見失い，非人間的立場に自分を追い込んでしまう疎外意識である．この小論では，『フランケンシュタイン』を分析することによって，およそ2世紀もの時空を隔ててなお，人間社会において共通の課題が存在することを確認したい．分析の順は，Ⅰ，現代における『フランケンシュタイン』の解釈，Ⅱ，『フランケンシュタイン』に現われる人間疎外の構図，Ⅲ，近代・現代を通じての疎外観の定義，Ⅳ，『フランケンシュタイン』の主人公ヴィクター・フランケンシュタインの疎外意識についてである．そしてⅠからⅣを総合的に考察し，結論を導きたい．

Ⅰ

メアリー・シェリーが『フランケン・シュタイン』を世に問うたのは，1918年，イギリス産業革命の中期にあたり，科学技術が飛躍的に進歩を遂げ，大量生産が可能になり，資本主義経済体制が確立していく頃であった．当時メアリーは21才に達しており，パーシー・ビッシュ・シェレーと恋愛関係に陥り，駆け落ちし，ヨーロッパ大陸に渡っていた．2人はバイロンがすでに住んでいたスイス，ジュネーブ湖畔のベルリープに滞在することになった．バイロン，彼の専門医ポリドリ，シェリー，メアリーの4人の交際は続き，様々な議論を楽しんでいた．その話題の中に，シェリーとポリドリが話していた生命原理のこと，ダーウィンの逸話など科学技術の分野にまで及んでいたと言われている．ある時，バイロンの提案によって互いに怪談話を創作してみることになった．メアリーはその創作にはかなり苦労したと言うことだが，『フランケンシュタイン』はこのような状況のもとに生れることになった．

『フランケンシュタイン』のザブタイトルは，The Modern Prometheus と書かれている．プロメテウスの人間に対する行為と神の怒り，彼に対する神の罰といったストーリーが『フランケンシュタイン』を読む人々の心に，二重映しとなって現われない訳ではない．作者メアリーがそのような意図を読者に解らせようと，サブタイトルに現代のプロメテウスと付けたのであろうが，読者には作者の意図とは異なる読後感を懐くことも少なからず存在するのではなかろ

うか．因に近代・現代における『フランケンシュタイン』の解釈には，３つの基本的な分析方法がある．Ⅰ，心理学的分析，フロイトの精神分析学を基に『フランケンシュタイン』の主人公ヴィクターの自我を追求していく方法．現代ではエレン・モアズが著書 *Literary Woman*[1] において，メアリーの『フランケンシュタイン』創作は，彼女の妊娠とその子供の死に影響を受けていることを指摘している．Ⅱ，社会学的分析，メアリーの父は18世紀啓蒙思想の流れを汲む著名な思想家，ウィリアム・ゴドウィンであり，母はイギリスのフェミニズム運動の先駆者，メアリー・ウルストンクラーフトであった．その両親の思想的影響を考慮して，『フランケンシュタイン』の主人公ヴィクターと彼の創造した怪物の闘争を，人間の権利の問題として解釈している批評家もいる．Ⅲ，科学的分析，現代医学の臓器移植の観点から見れば，彼の行為は空想的なものとして退けるわけにはいかないと考えられる．批評家の中には『フランケンシュタイン』を科学小説として捉え，メアリーをサイエンス・フィクション作家の一人と考える人もいる．この小論での『フランケンシュタイン』の分析は，Ⅰの心理学的分析に近いと言えるのだが，特にその分野を人間の自己疎外の問題に焦点をあて，主人公の自我意識を探っていく．

Ⅱ

ヴィクター・フランケンシュタインはどのようにして人間疎外に陥っていくのであろうか．彼はジュネーブの名家に生れ，幼い頃から子供らしい遊びを好まず，錬金術に興味を憶えた．書棚にあった父の書物を拾い読みしているうちに，学問をしたいという願望を懐くようになっていく．母の死に出会い，打ちひしがれる思いであったが，17才の時インゴルシュタット大学に向う．入学後まだ錬金術に興味はあったが，それが取るに足りないものと知り，近代自然科学の研究に没頭するようになっていく．

Whence, I often asked myself, did the principle of life proceed? It was a bold question, and one which has ever been considered as a mystery; yet with how many things are we upon the brink of becoming acquainted, if cowardice or carelessness did not restrain our inquiries. [2]

彼が関心を示した対象は，天地の秘密，自然の内在的霊，人間の神秘的魂であり，the principle of life，即ち生命の原理であった．人間の臆病と無関心のため，この原理が解き明かされていないと考え，２年の歳月を研究に没頭して，墓地を漁り，死者の肉体を切り刻み，それを接ぎたし，生命を注ぐ研究に日夜を費した．

I had worked hard for nearly two years, for the sole purpose of infusing life into an inanimate body. For this I had deprived myself of rest and health. I had desired it with an ardour that far exceeded moderation; but now that I had finished, the beauty of the dream vanished, and breathless horror and disgust filled my heart. [3]

生命のない肉体に生命を注ぐ仕事が完成し，そのおぞましい怪物を見た瞬間，ヴィクターの美しい夢は消え去り，恐怖と嫌悪感に取って代った．彼の心の急激な変化は理解しがたく，この時点で彼の精神は分裂してしまったかのように思われる．研究に没頭しているヴィクターには，精神的分裂は微塵も見られなかった．何ごとにおいても徹底し，完璧主義の性格のため，自分の創造したものが憎悪の対象となっていった．このエゴイズムそのものが，彼の意識の根底になっているように思われる．即ち，その怪物こそ my own vampire, my own spirit [4] であり，それが墓場から解き放たれることになったのだ.そして彼にとって大切な周囲の愛する人々が死に追いやられていく．

一方，怪物はヴィクターに見放され，スイスのモンブランの麓にあるド・ラセー家に接した

廃屋に身を寄せ，壁の隙間からその家庭の様子を観察していた．その一家の暖かい雰囲気を感じることで，人間の生活，文化，言語を壁越に学び，怪物自身も人間世界のすばらしさを知り，人間に対して和解し，人間らしさを身につけようと考える．しかし，小川に映る自分の姿におののき，勇気を出してその一家の盲目の老人に近づくが，帰宅した若夫婦に追放されてしまう．絶望した怪物は再び放浪に出，ある日公園で子供を殺してしまうことになる．その子供はヴィクターの弟ウィリアムであった．怪物はその後，創造主であるヴィクターとは憎み合う関係となっていく．

"I expected this reception," said the demon. "All men hate the wretched; how, then, must I be hated, who am miserable beyond all living things! . . . . . .
If you will comply with my conditions, I will leave them and you at peace; but if you refuse, I will glut the maw of death, until it be satiated with the blood of your remaining friends." [5)]

自分自身が怪物を創っておきながら，そのあまりにも忌わしい姿に憎悪し，省り見て良い方向に怪物を導こうともしない無責任なヴィクターは拒否し続ける．彼が拒否すればするほど，自分自身も怪物の復讐心によって悲劇的な状況に追いこまれていく．彼が怪物の要求に応じさえすれば，彼の周囲にふりかかる悲劇をくい止めることが可能なのである．しかし彼の本来持っている性格は，妥協を許さないのである．その極端な性格が，悲劇を一層つのらせていく．

Ⅲ

ヴィクター・フランケンシュタインの悲劇の根底にある人間疎外とは，どのような状況を言うのであろうか．ここで近代・現代おこなわれているいくつかの定義を分析してみたい．最初に，宗教学，特にキリスト教における疎外論の要約したものは次のようである．

Alienation, in theology, refers to the idea that the relation of the worshippers to God may be analogous to the alienation or estrangement between human beings. The word implies that a close relationship of affection, family, friendship, or another close tie has been broken, often with detrimental effects of the psyche. The disorganization of the self, worries about guilt, and loss of identity which the breaking of a long and very close bond between people may bring are all familiar. The idea that man, by his sin and indifference, may similarly alienate himself from a loving Father is distinguishing feature of the Judaic and Christian religious traditions. [6)]

宗教学における疎外観は，神と神に対する崇拝者との関りにおいて生ずる．疎外に陥る要因は，自我の混乱，罪悪感の悩み，人間の長い密接な絆の崩壊によるアイデンティティの喪失といったものが掲げられる．『フランケンシュタイン』には，神と人間の関りは直接登場しないように思われる．むしろ，怪物の創造主であるヴィクターと怪物の激しい精神的葛藤となっている．ヴィクターが科学者であることを考慮すれば，人間の科学的思考とその思考の末に創造された存在との葛藤とも受け取れる．次にヘーゲルの疎外論を考えてみる．

自己疎外　〔独〕Entfremdung seiner selbst ヘーゲルの用語．ある存在が，自己の内にあるもの，自己の本質であるものを外化し entäussern, 自己が外化したものを，自己自身の他者として，自己にとってよそよそしい fremd もの，自己に対立するもの，自己と離背するものとしてみなすこと，をいう．ヘーゲルの理念は神の世界創造の設計図を意味し，真の実在としての精神であるが，理念はその内部矛盾の発現によって，反対のものである自然のなかを転変する．これが理念の自己疎外といわれる．神は自然を創造すると，つぎに人間すなわち精神を創造するが，それは精神が精神に帰ることであり，理念が自己に帰ることである．それは自己疎外の

回復であり，ヘーゲルによって自己内還帰とよばれた．こうして，疎外という考えはヘーゲルの学説の形成にとって根本的な意味をもっていた．[7]

ある存在が自己の内にあるもの，自己の本質であるものを客観化し，自己自身にとってあたかも他者であるものと見なされるようになっていく．客観化された対象は，自己にとってよそよそしい存在であり，全く関係のない，相反する存在となる．ヘーゲルの自己疎外は，比較的『フランケンシュタイン』の主人公の精神構造を説明する上で，共通性があるように思われる．生命のない肉体と生命を注ぐ行為は，彼にとって美しい夢であった．所謂，そこにヴィクターの自己実現の可能性があった．内面にあった自分の夢が実現し，夢の対象であった生命を持った怪物の姿を見た瞬間，２年間の研究の成果があまりにも忌わしいものであることに，唖然とする．そして没頭していた２年間の研究生活と研究対象を完全否定してしまおうとする。ヴィクターが怪物を否定することは，とりもなおさず自分自身を否定することになる．しかし，ヴィクターは小説の最後までもう一人の自己と思える怪物に屈することはない．彼の精神は怪物と常に対峙し，対決し，彼が滅び去るまで戦う意志を貫徹しようとする．それ故に，彼の生き方は自己破壊にもつながっていく．この内的分裂こそ，自己疎外の構図ではないだろうか．

Ⅳ

ヴィクター・フランケンシュタインの陥った自己疎外意識について，George Levine は *The Endurance of Frankenstein* の中で次のように述べている．

They point centrally to the way "Frankenstein" as a modern metaphor implies a conception of the divided self, the creator and his work at odds. The civilized man or woman contains within the self a monstrous, destrucive, and self-destructive energy. The angel in the house entails a demon outside it, the Monster leering through the window at the horrified Victor and the murdered Elizabeth. Here, in particular, we can watch the specially secularized versions of traditional mythology. [8]

創造主であるヴィクターと怪物が分裂した自己概念を表現している．慎しやかな人間でさえ，その奥底に奇怪で破壊的エネルギーを秘めていることがある．George Levine は，人間の善的な面と悪魔的な面を捉え，その葛藤をヴィクターの中に見い出している．弟ウイリアムが殺害された後，彼は怪物の要求に一切応じようとしなかった．にもかかわらず，怪物は彼に最後通告とも思える要求をつきつけてきた．それは，怪物にとって伴侶となる女性を創ってほしいという願いであった．その願いにヴィクターは一度は承知したかに見えた．

In a fit of enthusiastic madness I created a rational creature, and was bound towards him, to assure, as far as was in my power, his happiness and well-being. This was my duty; but there was another still paramount to that. My duties towards the beings of my own species had greater claims to my attention, because they included a greater propotion of happiness or misery. [9]

彼が怪物の願いをかなえようとした気持の背景には，理性を持った生き物を創造した彼の義務として，その怪物の幸福と福利を保証しなければならないという気持があったからである．一方，彼は人類に対する責務を怪物に対する同情心以上に感じている．ヴィクターが怪物の要求を聞き，怪物の伴侶を創造すれば，悲劇を最少限にくい止めることができるのだが，彼はそうせず，怪物の伴侶を創るためのすべての器具を海に投げ捨ててしまう．彼の怪物に対する不信観は決して回復することはないのである．

彼は周囲の愛する人々，親友のグラーベル，彼の花嫁になったエリザベスを失い，怪物に対

する怒りを激しく燃やし，北極のかなたまで怪物を追いかける覚悟をする．だが心の中は常に相対峙する自己のジレンマに悩みつつ，自分の最期に近づいていく．怪物を追跡し，北極に向う船上で，ウォルトン船長に最後のヴィクターの言葉をかたりかける．

Farewell, Walton! Seek happiness in tranquillity and avoid ambition, even if it be only the apparently innocent one of distinguishing yourself in science and discoveries. Yet why do I say this? I have myself been blasted in these hopes, yet another may succeed."[10]

怪物がまだ生きていることに心悩ませながら，死を控えた彼の心の静けさは，今までにない幸せな瞬間と言っている．さらにウォルトンに対し，平穏無事な中に幸せを探すように言い残す．この言葉はヴィクターの極端にまで徹底した自己探求と自己実現への深い反省であろう．Mary Thornburg はそのことについて，次のように述べている．

The creation of the Monster is a "perversion of the natural order" but is inevitable, given the evolution of human desire for knowledge, and is necessarily followed by "man's confrontation with himself." . . . . . and the corruption of technology—the Monster's turning to evil as his good—is a result of the inability of humanity to deal morally and ethically with its technological success. [11]

ヴィクターの怪物創造は，自然秩序をゆがめることであるが，それは必然的なことであり，知識に対する人間の欲望を促し，やがて必ず人間が自分自身と対峙するようになっていく．Thornburg は怪物に人間の科学技術の誤った行き過ぎた状態を見，それに対して責任を全うしないヴィクターの中に，自分の欲深い心を抑制できない人間の姿を見い出すというのである．

結　　び

『フランケンシュタイン』という小説は，メアリー・シェレーによって炉辺のひとときを楽しむために創られた怪談話であった．にもかかわらず，この小説には現代にも通じる人間の心の葛藤，自己分裂をきたした疎外意識が読みとれる．その意識が作者メアリーの中にも潜んでいて，創作されたのであろうか．作者の複雑な家庭状況の影響ばかりでなく，何か現代に共通する疎外意識が産業革命当時のイギリスに生じていたのかも知れない．

Notes

1）エレン・モアズ著，青山誠子訳，女性と文学，（東京：研究社，1978），p. 158.
2）Mary W. Shelley, *Frankenstein,* (New York: Everyman's Library–Dutton, 1963), p. 44.
3）Ibid., p. 51.
4）Ibid., p. 74.
5）Ibid., p. 100.
6）Philip P. Wienered., *Dictionary of the History of Idea,* (New York: Charles Scribner's Son, 1968), p. 34.
7）林　達夫他，哲学事典，（東京：平凡社，1971），p. 890.
8）George Levine and U. C. Knoepflmacher ed., *The Endurance of Frankenstein,* (Berkeley: University of California Press, 1974), p. 15.
9）Mary W. Shelley, *Frankenstein,* (New York: Every man's Library–Dutton, 1963), p. 235.
10）Ibid., p. 236.
11）Mary K. Pattenson Thornburg, *The Monster in the Mirror,* (Michigan: O-M-I Research Press, 1984), pp. 132－133.